

コロナ禍の青少年のこころ

「いのちの旅は終わらない」の実践から

宮城学院女子大学

- **背景・考察** 将来、養護教諭をめざす学生。文系ということもあり人体に関する知識がほとんどなく、高齢者のイメージも少ない。テレビやニュースも自分の興味のあるものしか見ないので、社会状況に対する意識が低い傾向にある。また、経済的に余裕のある家庭の学生と奨学金・バイトでつないでいる学生の二分化が顕著である。将来母親になることを意識している。実施後産み育ててくれたことへの感謝が引き出され、様々な立場や気持ちを考えるようになった。高齢者や病気の方々の背景にある生き様や、普段の生活風景などに思いをはせ、これからの生き方を考えるきっかけにもなった。

コロナ禍の青少年のこころ

「いのちの旅は終わらない」の実践から

宮城学院女子大学

■ アンケート 「自分の価値や生きる意味を探してしまう」
「今まで生きる価値を考えて、まだないと感じることもあった」と、自分の存在意義が揺らいでいる状況がみられ、自尊感情が低い傾向にあった。
実施後には、「人は価値があるから生きるのではない、生まれたから毎日を自分なりに一生懸命生きる」「人の苦しさ・辛さをわかる人になりたい」との言葉があり、これから生きることに希望をいただいたようである。

■ コロナ禍で危惧する点
経済状況のひっ迫が退学につながり、将来に影響がでる。
コミュニケーション不足からの精神的不安定の加速。